

石橋秀雄著

『清代史研究』

上田 信

「清」という時代を研究するとき、全く異なる二つの視点が成り立つ。一つは、明代と清代、そして中華民国、中華人民共和国といった流れのなかに位置づけるものである。この場合には、中国の政治・社会の連続性と変化が主な関心事となり、例えば、明代の後期から貨幣納に移行し始めたことから始まる税制の変化は、清代の地丁銀の成立をもつて完了するといった研究が、これまで進められてきた。評者なども、この視点から「清」を見ていた。いま一つの視点は、現在の中国東北部で半農半牧の生活を行なってきた満州族の造り上げた王朝として「清」を見るものである。石橋氏は、この立場による清代史研究の第一人者であるといつてよいであろう。氏の研究がこのような形でまとまったことは、後者の視点から研究する人が相対的に少ないために、非常に大きな意味を持つ。前者の視点からでは死角

に入ってしまった歴史の部分が、本書を読むことで見えてくるからである。

本書は、立教大学・日本女子大学・東洋大学における石橋氏の教え子たちが編集したものであり、石橋氏の永年にわたって発表されてきた論考を、テーマに従い、四部構成に編み上げている。紹介に入る前に、基本的な流れを整理しておこう。十七世紀初頭にヌルハチは、それまで明の間接統治下で分裂していた満州族を統合し、「後金」を建国、一六一九年には明の大軍を破り遼東に進出し、初めて農耕民である漢族を統治することになる。次のホンタイジは、三六六年に国号を「清」と改め、中国的な官僚制を導入し、王朝としての形態を整えていった。四四年に、李自成が明を滅ぼしたのに乗じて、清軍は華北に入る（入関）のである。その時から、一九一一年まで、「清」は中国の王朝であり続けた。

本書の第一部は、入関前の満州族の社会の分析に関する論考から成る。第二部は、「後金」が漢族を統治するためにどのような政治組織・土地政策を組み立てていったかを論ずる。第三部では、「清」の中国統治を可能にした軍事・社会組織である八旗に属する旗人が、入関後に墮落し、生活的困窮の度合いを深めていく様子を、清朝の旗人救済政策を取上げながら、描いていく。第四部は、清代の官僚

の動向を分析したものである。個々の論文は精緻で、「清」の歴史を理解するうえで鍵となる問題を深く掘り下げている。それを本書のようにまとめてみると、一本の太い歴史のうねりを読むものに感じさせる。

清代史を専攻していない人は、本書を頭から読んでいくよりも、第二部にまず目を通し、それから第一部・第三部と進んでいくと良いであろう。ヌルハチが遼東に進出したときに、異なる文化が正面からぶつかった。ヌルハチは農耕社会に基礎を置く支配体制の樹立を意図した。そのことは、農耕社会への侵奪をひとつの生業の一部としていた満州族の社会システム全体に、「ゆらぎ」を与えることになった。ヌルハチは最初、漢族の支配層すなわち旧明官僚を自らの支配体制のなかに取り込むことによって、農耕社会を統治しようとした。しかし、この試みは失敗する。漢族の支配層は腐敗しており、農民の支持を得ていなかったからである。旧明官僚を懐柔しても、漢族の農民は離反していく。このような状況に対処していくために、満州族と漢族の合住、旗地の設置といった政策が模索される。この政策は、満州族の社会システムに構造的な変化をもたらしたであろう。

その変化を満州の側から見ようとしたものが、第一部に入れられている諸論考である。石橋氏は、満州族の社会シ

ステムを理解するうえで鍵となる言葉に着目し、満州の史料からそれらの言葉の用例を洗い出し、微妙なニュアンスの変化も見逃さない。遊牧民族に特有な部族的国家・社会の秩序として、国におけるハン（汗）Ⅱインゲル関係、部族におけるベイレ（王）Ⅱジュシェン関係、家におけるエジェン（主人）Ⅱアハ関係を挙げる事が出来る。しかし、これらの関係は、満州族の社会のなかに漢族が組み込まれた結果、変化を余儀なくされる。漢族は被支配者として入るために、各レベルのなかで下位に属する側（すなわちイルゲン・ジュシェン・アハ）の内容が、変動することになる。従って、これらの言葉には、固定した訳語を結びつけることは出来ないのである。

第三部では、入関後の旗人（その主要な部分は満州族）が、漢族の社会における土地をめぐる社会関係のなかに巻き込まれ、経済的に解体されていく過程が主題となる。清代中期において、清朝の政府は、旗人の経済的な基盤である旗地の管理を強化したり、旗人に直接的な救済を与えたりして、旗人の没落に歯止めを掛けようとしたが、結局は失敗に終わるのである。

すぐれた書物は様々な読み方を許容する。評者は、満州族の社会が、漢族の社会に直面して、システム的に変化をするという歴史のダイナミズムを読み取った。中国史を専

石橋秀雄著『清代史研究』(上田)

攻していない人には、ちょっと取っ付きにくいという印象を、本書は与えるかもしれない。しかし、異なる文化がぶつかり、渦を巻く様子を把握したいと思う者は、本書から多くのことを学び取ることが出来ると思う。

(旧菊版、本文三六五頁、税込五一五〇円、緑陰書房、一九八九年)

※石橋秀雄氏は、立教大学名誉教授

※上田信氏は立教大学文学部助教授